

シンポジウム「ベケットの1930年代」(司会:岡室美奈子)

木内久美子「無知の実践:1930年代ベケット再考」

Kumiko Kiuchi. "Praxis of Ignorance: Re-examination of Beckett in the 1930s".

「無知」が1930年代のベケットにとって鍵概念のひとつであることは、近年のベケット研究で文献学的に立証されつつある。例えばディルク・ファン・ヒュルはマウトナーの言語批判とベケットの言表不可能性(ineffability)の美学との関連を論証しており、またマシュー・フェルドマンはこうした美学が確立されるための重要な契機としてゲーリンクスの「無知」の概念を論じている。本発表ではこうした先行研究を踏まえたうえで、「無知」に対するベケットの関心が、1929年に書かれたジョイス論にすでに書き込まれており、ともすればその批評の身振りが、マウトナーやゲーリンクスの読解によって事後的に獲得される「無知」の知識をすでに実践してしまっているのではないかと提起したい。

具体的な作業としては、まずファン・ヒュルやフェルドマンなどの著作や1930年代に書かれた書簡(セザンヌ書簡やカウンへの書簡など)を参照しながら、1930年代のベケットにおける「無知」の重要性を記述・整理する。次にこれを踏まえたうえでジョイス論を読解する。この評論はさまざまな文献からの無断引用・パラフレーズからなる。それは『フィネガンズ・ウェイク』の剽窃者=物書きのシェムの技法に通ずるものだ。引用・加工・剽窃の技法においてシェムと批評家ベケットとを比較することで、剽窃者=物書きのシェムの「模倣」を意図していたはずのベケットの批評の手つきが、同時にヴィーコ的な「無知」の実践としても機能してしまうこと、その結果、剽窃者=シェムの忠実の模倣が、物書きシェムの作家的権威を脅かしかねず、この点でベケットの批評の身振りは後年のジョイスとの決別をすでに示唆しているのである。

森尚也「個と普遍:ヴィンデルバント『哲学史』のベケット作品への形而上学的影響」

Naoya Mori. "On Particulars and Universals: Windelband's *History of Philosophy* and its Metaphysical Influence upon Beckett's Works".

個と普遍、particulars / universals という対立軸は、ベケット作品の大きな主題で

シンポジウム「ベケットの1930年代」(司会:岡室美奈子)

ある。個の感情、個の情熱こそ、詩が擁護すべきもので、形而上学は個の感情を消去し、普遍化してしまうとベケットはジョイス論(1929)のなかで述べていた。けれども1930年代、ベケットは形而上学に驚くほどの興味を示し、アレクサンダー・アーチボルトやヴィルヘルム・ヴィンデルバントの哲学史を読み、西洋思想を体系的に学ぼうとした。さらにゲーリンクス、ライプニッツ、スピノザなどの形而上学に親しみ、後の作品に直接的・間接的に言及・応用している。のみならず、小説三部作や『事の次第』や演劇作品『クワッド』、『芝居』、『なにどこ』など、個体としての登場人物の差異を出来る限り消去している。こうした抽象劇(abstract drama)とも呼ばれるベケット作品は、形而上学的には主体を「永遠の相のもとで」(スピノザ)捉えようとしたものとも言える。1930年代の形而上学研究を経て、ベケットにおける個の重要性は、後の作品においてどのように再構成されたのか? ヴィンデルバントの「哲学ノート」(1932-34, TCD MS 10967)は、ひとつの切り口を示してくれるだろう。

川島健 「境界線の女たち: ベケットのダブリン詩篇」
Takeshi Kawashima. "Women on the Boundary: Beckett's
Dublin Poems".

2

ベケットの作品は女性蔑視的なものとして受け取られてきた。『わたしじゃない』(1972)での、他の身体部位から切り離された女の「口」にみられるように、ベケットの女たちは常に男たちの視線に晒され、軽蔑的な言葉で修飾されてきた。1930年代にベケットが残した詩に登場する女たちの身体も断片化され、フェミニスト的な観点から批判されてきた。またベケットの詩の多くは自伝的に解釈され、その風景は若き作家の心象風景とみなされてきた。本発表はこのようなフェミニスト的批判と自伝的解釈からベケットの詩を解放し、政治的な意味を見出すことを目的とする。ベケットの女性蔑視的な視座は常に男性的な欲望をも揶揄するレトリックとともにある。またベケットの自伝的で日常的なダブリンの描写が当時の社会の歪を映し出している点を忘れてはならない。これらの点を検証するために、まず1930年前後のダブリンでの女性をめぐる作品と政策を概括し、次にそれを背景にベケットの詩集『こだまの骨』に収録されたダブリン詩編における女性身体と性表象を検討する。